

# 建築は語る —都市の過去・現在・未来—

建築家 東洋大学理工学部建築学科専任講師 藤村 龍至 氏

【西尾】 皆さん、こんばんは。お待たせいたしました。MURCオープンカレッジの本年度最後の勉強会となります。早速、始めさせていただきたいと思います。

最初に講師をご紹介させていただきます。きょうは講師として藤村龍至先生にお越しいただいています。(拍手)

藤村先生は1976年生まれですので、まだ30代の新進気鋭の建築家です。今回、建築家の方をこういった勉強会の講師にお迎えするのは珍しいかなという方もいらっしゃるかもしれませんが、参考図書として紹介させていただいた『批判的工学主義の建築』という先生のご著書のブックカバーには、磯崎新さんから、「ザハ・ハディドを見出して30年過ぎた。妹島和世を見出して20年過ぎた。次に思想を持った建築家があらわれるのは2015年のはず。藤村龍至の『批判的工学主義』は、この期待に応えてくれるか」というコメントがあります。つまり、藤村先生は、建築家という枠を超えて、思想を持った活動を展開され、それが社会に結び付いて大きな影響を及ぼしているということで注目されている方といえると思います。「ソーシャル・アーキテクト」という呼び方もできるかと思います。今日はぜひ、こうした建築と社会との接点に注目してお話をお聞きいただければ、と思います。

私は、さいたま市役所に任期つき職員として勤めていたときがあります。そのときには、縮小する社会において、高度経済成長期に大量に建築され、今後一斉に更新時期を迎える公共施設をいかに縮小させていくか、という仕事をやっていました。住民の合意を形成しながら進めていかなければならないこの難しいテーマの仕事で、藤村先生とご一緒させていただいたことがあります。建築の設計におけるプロセス論を、こうした地域社会が直面する課題における、住民の合意形成に生かしていくという最先端の実践もされている先



生でありますので、そういったお話もきょうはお聞きできるといいなと思っております。

藤村先生、まず1時間ぐらいお話しただいて、その後、質疑応答・ディスカッションさせていただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

## 講演

皆様、こんばんは。ただいまご紹介にあずかりました藤村と申します。きょうはお忙しい中をお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

きょうは「縮小時代の建築家像——ソーシャル・アーキテクトを目指して——」という題でお話しをさせていただければと思います。ちょっと欲張ってスライドをいっぱい詰め込みましたので、1時間少し、高速といえますか、少し早口になってしまうかもしれませんが、悪いくせで、いつも早口になってしまうんですけども、なるべく、しっかりご説明できるようにしたいと思っております。

理事長とお話しさせていただいてまして、建築とその思想ですとか、人文社会学系の話に興味を持っていたという話を伺って、建築の細かい話はいいかんと思って少し省略した方がよかったかなと思ったんですが、あえて建築とは何かみたいなこともあわせてお話し



西尾氏

した方がいいのかなと思って、改めてそういうお話をさせていただければと思います。

最初に自己紹介させていただきます。私は東洋大学理工学部建築学科で講師をさせていただいております。先ほどご紹介ありましたように、さいたま市も含めて東洋大学の建築学科が埼玉県川越市にあることから、地元のみまちづくりにかかわらせていただいたり、公共施設に係る委員等をさせていただくようになりました。

きょうお話ししたいのは、縮小時代のことなんですけれども、いわゆる大学をベースにして活動する建築家といいますと、1960年代の丹下さんが東大都市工に研究室を持たれて活動していたことが思い起こされます。当時の丹下さんの研究対象は、ご存じのように、東京の人口拡大、人口集中に対して、どう対処するかということでした。一極に集中してしまうので、東京から木更津の方に扇状都市を構想して、都心に一極集中してしまうのを扇状に分解して、その拡大に備えようというイメージでした。

その後、丹下さんの場合は東京から太平洋ベルトにすうっと展開していくという、最終的には国土像の提案に至るわけです。今は問題が反転しております、人口減少ですとか、都市の拡散に対してどう対応するかというのが今日の課題となっております。私の活動領域はそういうところで、まさに都市が縮退していく現場のひとつであります東京郊外のまちづくりが主題でありまして、そこで考えたことをお話できればと思っております。

さて、私の原点からお話しします。私は1976年の生まれでして、大学に入ろうとするところに阪神・淡路大震災がありました。私の父は神戸の出身でして、幼いころから神戸に通って、いわゆる株式会社神戸市とって、80年代のころに非常に元気があったと思うんですけども、活発だった神戸の都市開発を見て、こういうことがやりたいと思って建築家を志した経緯がありました。

都市がこういうふうには崩壊してしまうところで、同時にWindows95の発売等もあって、いわゆるインターネット元年と呼ばれて、宮台真司さんと隈研吾さん等が対話をされて、「これからの人々のコミュニケーションのベースはネット上に移っていくので、建築家は要らなくなるんだ。建築が地域性を考慮して考えた公共施設に誰も集まらない。人が集まらないので、テレクラの待合い場所になっている」と、宮台さんが当時、指摘されていきました。建築家不要論あるいは建築不要論みたいなものが吹き荒れている中で建築の勉強をスタートいたしました。

このような時代の転換点で、建築の価値ですとか、開発の価値がガラガラと変わるというところをルーツとしているということもありまして、そういったことについて、すごく関心をもって建築を眺めるようになった次第です。

一般的な社会のイメージといいますと、バブル期の建築家の活動は人々に印象を残しているのではないかと推察されます。私も中学から高校ぐらいのころにかけて、アイコンックな、派手な建築が建っている。これはフィリップ・スタルクで、後ろのビルの泡はアサヒビールの本社で、ビールの泡を模してという形になっているんですけども、こちらは日建設計。ほかにも取り壊されてしまいましたが、キリンプラザ大阪は高松伸さんの設計でしたし、安藤忠雄さんも、閉鎖されておりますが、サントリーミュージアムという建築をつくりました。

これはサントリーで、1個前がキリンビールで、これがアサヒビールなんですけれども、たまたまビールメーカーが多いわけです。私は、これらのアーキテクトのこ

とは、敬意を込めて「ビール・アーキテクト」と呼んでいるんですけども、こういったメーカーの文化活動に対して建築家がある種の造型力を発揮してアイコン的な建築をつくるというイメージが社会の中では強烈に残っているのではないかと。東京都庁舎も時期をほぼ同じにしておりまして、このようなシンボリックな形態をつくって、豪華庁舎であるとか、維持管理費の問題とか、そういったことが批判される。

バブル期の建築家のイメージは色濃いんですけども、丹下健三がルーツとしているのは、ご存じのように、平和記念資料館です。コンペが行われたのがちょうど私ぐらいの年齢、30代後半に、丹下さんが4、5人のメンバーで取り組んだコンペが実現して、丹下さんの事実上のデビュー作のひとつです。7mのピロティで持ち上げられたコンクリートの箱。

丹下さんは、この建築で非常に有名になっていくわけです。一般的には、ピロティというル・コルビュジェが提唱した近代建築のポキャブラリーを日本に持ってきて、その上に日本の木割りのプロポーションで構成したという解説がなされるんですけども、そのようなモダニズムの輸入と和洋化という文脈を超えて丹下さんが構想していたのは、平和記念資料館の集会をどのようにつくっていくかということと近年、振り返られるようになってまいりました。

丹下さんのその後の作品ですけども、これは香川県庁舎です。金子正則知事という6期ほど務めた香川県知事の初期のころのプロジェクトで、金子知事の戦後民主主義の思想を体現するのだという思いで、誰かいい建築家がいなかったというところで、前川國男がたまたま岡山県の県庁舎をやっていたので、香川で同じことをやるわけにいかんということで、前川國男ではなくて、その弟子の丹下さんに白羽の矢が立って、猪熊弦一郎の紹介で設計をすることになったそうです。

そのときに金子知事の言う戦後民主主義の開かれた政治の場をどうつくるかという思いに対して、丹下健三は、先ほどのピロティを開かれた庁舎の言語にしたり、ピロ

ティがあって、上の庁舎もセンターコア方式という、真ん中にエレベーターコアがあって、四周に執務室があるという平面形状をしているんですけども、RCのラーメン構造の庁舎ですと、学校建築のように庁舎建築も一般的には南に向いて、昔の団地のように建ってしまうんですけども、そういうふうなものではなくてセンターコア形式にして、四周に対して開かれている。それを戦後民主主義の開かれた庁舎だと読みかえて、金子知事のことを当時のモダニズムの言語に置きかえていくということをしていただけたわけなんです。

その後、64年の香川県立体育館は取り壊しの危機に瀕しています。こうした建築は、当時の社会の思想あるいは気分というものの、精神性みたいなものを象徴していると読めば、一個人の造形ということを超えて、その当時の社会の造形であるにとらえることが重要なのではないかと。これを近年、思うようになった次第であります。

新宿の西口広場は、広場建築の中では象徴的な存在です。ここで集会が頻繁に行われるようになったときに、広場という名前をかえて「新宿西口通路」と改称することによって、通路であるから集会は行っていけないというふうに管理側がこれを読みかえることによって、ここでは広場が禁止され、以来、日本の都市空間は集まるあるいは集会をするというのがある種のタブーになる。2002年の日韓ワールドカップの際に、日本代表が初めて決勝トーナメントに進出した。若者がどこか集まるというときに、ソウルの場合ですと市庁舎前に集まるんですけども、日本の場合だと集まる場所がない。そこで、みんな六本木の交差点で行ったり来たりしながらハイタッチをするという。今、それが渋谷の駅前等でも展開して、ハチ公を行ったり来たりするということになっているわけです。広場を失った日本みたいなものが、こういうときに完成されたというのがひとつの帰結なのではないかと。

この広場の提案というのは、万国博覧会の際に「お祭り広場」というのがあって、CIAM (Congrès International d'Architecture Moderne ; 近代建築国際会議) 世代の建築家は広場的なものをどう都市につく

るかというのが主題のひとつだったわけです。ここでもうひとつの時代の転換があったと思われるのは、そのような広場の喪失とともに個の時代に突入して、中銀カプセルタワーはその象徴でありますけれども、ひとりの空間を志向していくようになっていく。

万博の中でも、黒川紀章は3つのパビリオンを手がけて、カプセル建築を世に知らしめていくわけですが、そのひとつの帰結として、安藤忠雄さんや伊東豊雄さんの世代がこのような独立住宅をつくっていく。このとき、安藤さんは「抵抗の砦」という言い方をして、社会や都市に対して抵抗する個の空間をつくるのだと宣言されていたわけです。商業的に言うと、渋谷パルコが73年ですけども、このころから自立した女性像が描かれたりしていく。

他方で、建築的にひとつ流れをつくっているのは巨大建築の流れです。68年の霞ヶ関ビルをきっかけにして、日本一の超高層を誰が取るのかという競争があった中で、丹下・電通チームと山下設計・三井不動産チームがありました。三井不動産は三菱地所を追いかける2番手の立場で、電通も当時は新興のベンチャー企業のような企業で、それぞれが日本一の超高層をものにしたいのぎを削っていたとされるわけです。このとき電通の吉田社長が急逝してしまって、丹下健三は実現せず、山下設計に最初の高層ビルを取られてしまうわけですね。丹下さんは非常にくやしがって、涙を流したなんて書かれています。

霞ヶ関ビルを匿名の組織型の設計事務所が最初に実現したというのが今後の日本の流れを決定した部分があります。広島のコムペで1位が丹下さんだったんですけども、そのときに2位だったのが山下設計の創始者の山下寿郎という建築家で、山下、丹下の対決は、1回目は丹下が勝つんですけども、2回目では山下が勝つ。山下設計が勝って、このビルを手がけた若手がその後、新宿の三井ビルを手がけていくんです。

今日の日本が十八番とする地下鉄に接続して商業施設があって、ホールがあって、その上にオフィスタワーが

1,600%の容積率で積み上がるという、ミッドタウンだとか、ヒカリエだとか、これが小淵・小泉改革の後に雨後のタケノコのごとく発達していくわけです。こうした超高層のコンプレックスビルは、もはや世界中探しても日本にしかないというものになっております。たとえば日建設などは、上海では公共施設だとか商業施設には手を出さずに、オフィスを頂点としたコンプレックスビルを売りにするというぐらい、もはや日本の設計事務所にとっては輸出品のひとつになっている。

ドイツは自動車産業が盛んでメッセ建築がいっぱいあるものだから、ドイツの設計事務所がメッセ建築を輸出しているような感じで、日本の場合は、ある種、これを輸出品のようにとらえているような節もあるというぐらいに、戦後日本の一方の集大成としては高容積のコンプレックスビルがある。その原点は先ほどの霞ヶ関ビルだったわけです。

このときに論争がありました。前川國男の東京海上ビルと新宿三井ビルが……。前川國男のビルは皇居のわきに建つので景観に配慮して、れんがの打ち込みタイルで、きちんと陰翳をつけた。こっちはガラスのカーテンウォールです。これを批判した神代雄一郎という明治の歴史の先生がいるんです。そのときに神代雄一郎さんは、こちらは環境のことを考えない商業主義に徹した戦後生まれの商業主義者で、こちらは戦前生まれの良識派というふうに図式的な批判をした。神代雄一郎さんがこちらのビルを批判したときに、ガラスの上に貼る養生用シートを仕上げと勘違いするという事件があって、それを一斉にたたかれてしまって、その後、神代雄一郎さんは評論家としては失脚してしまう。さらに、高層建築物について何か批判するということが自体が日本の建築界ではタブーになっていくんです。それぐらい技術に依存しているので、従来の建築を外から見て批評するという、技術的な前提を理解しないで批評してしまうことは危険だということになって、こういうことが建築批評の対象にならなくなる。そういうことが70年代に起こります。

これが反復したのが国立競技場の問題であります。横

文彦さんが神代さんにあたり、日建設計のチームがこれをバックアップしてつくっているわけです。当時の構図とちょうど反復して、建築がどんどん巨大化していくんですけれども、こういう巨大な建築がよいのかという論争が反復したようなところがありました。

このときは神代さんが認識違いをして、当時30代か40代ぐらいだった、これをまとめていた日本設計とか日建設計の若手の人たちが、「このボリュームを決めているのは発注者であって、設計者のことを批判してもしようがないのだ。ですから、発注の内容を吟味しないと、この建築を批判することはできないのだ」ということを反論する。日建設計の設計チームでオピニオンリーダーだった林昌二の「その社会が建築をつくる」という有名な反論があるんですが、その社会が建築をつくるということが、その後の組織側のイデオロギーになったと磯崎さんは言うのです。

また同じことが反復されて、国立競技場のときに槇さんが神代さん側で、日建設計の誰かが「その社会が建築をつくる」と反論すれば、歴史的には完成したところがあったんですけども、このときは槇さんの方が一枚上手というところがあって、うまく運動が展開して白紙撤回となりました。

このような流れもある中で興味深いのは、まちをつくるという考え方で、巨大開発がまちをつくる。これは神戸のポートピアですけれども、人工の海上にまちをつくる。そして、ディズニーランドができて、虚構のまちをつくる。その後、たとえばハウステンボス等にも展開していくわけです。こういう虚構の新しい人工のまちをつくるという考え方ができてまいります。

先ほどのバブル、そして阪神・淡路震災を経て虚構性というものが反省されて、今はどうなっているかといいますと、90年代以降、私が建築を学び始めて以降は、透明性ですとか、地域の中でどういう素材を使うかという、ある意味、近代主義的な建築の考え方に回帰していきます。

これは金沢の21世紀美術館ですが、四周どこからで

もアクセスできて、それに対してすべてガラスが使われていて、どこからでも見ることができる。このつくり方そのものも、建築のあり方自体がリテラルに透明なんです。それに加えて、最近ではつくり方を透明にする。これは大船渡の市民会館ですけれども、コンペで選ばれた新居千秋さんという建築家がその後、ワークショップを54回重ねて、四角い箱だったのが少しずつ変形していった、プログラムも変わって、最後はホテルの周りに図書館が張りついて、こんな造形になった。これが三陸の海岸の岩に近づいていったのだという話になって、こういう建築ができたりました。

同じ建築家が、わずか10数年前につくっていた建築がこういうものでして、建築が思想をあらわし、時代を映すと思うのは、80年代から90年代の頭にかけては、このように歴史を参照すると、それが浮かび上がってきます。

当時、水戸の佐川市長の考え方で、スポーツをしている人が本を読めようにしなければいけないということで、回りに芝生があって、そこでスポーツをしてもいいことになっている。そのすぐわきに図書室の部屋があって、どこから入れてもいい。ブックディクテーションシステムだから、管理システムよりも、どこからでもアクセスできることを図書館は体現するべきだという思想があって、先ほどの香川の子金子知事と丹下とはちょっと違う形で、このようなプランが実現したということが伝えられたわけです。

当時でいうと、個人の佐川市長という強い思想家がいて、それに対してプランを与えるという関係をとっていたのに対して、今はそれが集合になって、市民のワークショップを54回通して形をつくるのだという形に変わっていく。ですので、同じ建築家でも95年の以前、以後で思想のあらわれ方が変わっていく。こういう社会に対して、どう応えていくのかというのがあるかと思いません。

そのような政治的な体制と同時に、日本の中では人口減少があって、これは震災後につくられた「みんなの家」

というものですけれども、これは3人の建築家が共同設計をするということを実験的に試みたものがコミュニティ施設として、この真ん中にいらっしゃる菅原さんのためにつくる。伊東豊雄さんという建築家は、これをひとつの建築家のカウンタープロポーザルみたいにしていて、こういうことにどう応えていくのかと問題提起されたわけです。その近所にコミュニティカフェがあって、実践していたりとか。私と同世代ぐらいの建築家たちはみんな、こういう活動に非常に熱心に取り組んでいて、コミュニティの中で小さくてもいいから建築家がどう働くのかということに対して高い関心を持っているという背景があります。

先日、陸前高田に学生と一緒に行ってきたんです。ちょうどかさ上げ工事が行われています。ベルトコンベアで今泉地区から土砂を運んで、今泉地区から山の土を削り出して、高田地区のかさ上げをするということが行われているんです。その間にベルトコンベアが立って、このようなかさ上げをして、9mから12m程度、地盤を上げるということが行われているわけです。

これがわれわれの世代にとってはなつかしいといえますか。私は神戸に思い出があるものですから、神戸の60年代に行われていた「山、海に行く」と言われた、鶴甲山や須磨山等の土砂を掘削してポートアイランド等、神戸の港湾用地の埋め立てに用いるという。当時、神戸市長だった原口忠次郎という京大の土木を出た工学博士という方がいます。荒川放水路の現場に行って、満州に渡って、戦後、引き上げてきて神戸市長になるんですが、その人が考案した神戸の山からの水害と港湾の不足を同時に解決する方法として、4カ所の独立した峰を削って、24時間、ベルトコンベアで搬送して、工事が終わったら、このトンネルは下水道に使うという一石三鳥の計画があったわけです。こういうことが時代を超えて反復しているというところがあります。

この南三陸の防災庁舎などは、この後ろにかさ上げが迫っているんですけれども、これが今日の建築のある種の役割を示していると思えるのは、南三陸では防災庁舎

を残すという決断がされている、陸前高田では人が亡くならなかった建物だけ残すという判断をされたそうです。まちによって対策がとられている方針は違うんですけれども、南三陸の場合には、このように庁舎が一種の慰霊碑の役割を果たしていて、土木の持っている力と建築が持っている力がある種対比されているのではないかと。建築が具体的に人の記憶にかかわっているとか、動きにかかわっているということ、はからずも象徴しているのではないかと考えた次第です。

香川県庁舎と先ほどの防災庁舎はそれぞれ同じような庁舎建築の一種の骨組みが対比されるようなところがありますけれども、今日、振り返って、建築の役割とはいったい何かということを考えざるを得ないところがあるかと思えます。

さて、そのような時代的な流れの中で建築の思想があるんですが、後半は私のふだんの実践をお話しさせていただければと思います。

東洋大の理工学部で、戦後の日本の住宅を10分の1でつくみましょうという授業を毎年やっているんです。こういう大人数を教えていまして、2008年ぐらいから建築の教育に携わるようになったんですけれども、これをやっているときに私が重視していることとして、建築のプロセスを重視するということがあります。

これは魚の発生過程のスライドですけれども、一段階ずつ形態が発生して複雑な形になっていく。このように建築を設計できないかということでやっております。このときに私が原理にしているのが、「ジャンプしない」「枝分かれしない」「後戻りしない」という3つのルールを自分に課すということをしております。これをするによって、建築の設計の考え方は卵が魚にかえるような形で可視化されるのではないかと考えているんです。

これはいったいどういうことかといいますと、建築の設計というのはポリウムスタディという単純な面積と高さだけ与えた形態からスタートすることが多いんですけれども、変更があるたびに一個ずつ模型をつくって、同じ縮尺で保存するという。やっていること自体は単純



ですけれども、それを反復していくことによって、形態がなぜ発生していたのかというのを記録するというところを行っています。10年前に自分で設計事務所を開いてから、すべてのプロジェクトでこういう模型を保存するというところをしています。

これをやって設計していきましてのが、「BUILDING K」です。1階に店舗が入っていて、上の方に集合住宅があって、上の方に共用部があってというビルなんですけれども、一段階ずつ問題を発見して解いて、それを集大成して記録するように建築をつくっていく。そういうつくり方をしていくと、たとえばまちとの関係なんか、あるいはボリュームのあらわれ方も変わってくるのではないかと。

もうひとつの例を示しますと、これは住宅なんです。単純なプランから始まって、それをクライアントにお見せしながら、ここはこうした方がいいんじゃないか、ああした方がいいんじゃないかというのをやっていくと、だんだんミクロな問題が発見されてひとつの形に集約していく。

ひとつの考え方としては、材料だとか形だとかあり方というのは、ひとつひとつのボキャブラリーは共通しているんですけれども、たとえば吹きつけの塗装、近所に使われているような材料と同じような材料と、同じような工期と、同じようなコストというところなんですけれども、そこにアルミ引き違いサッシだとか、そういうことが使われているんですけれども、その関係はちょっとずつ違う。そうすることによって、今までにない関係が

つくられたりする。

一例ですが、開口の枚数は非常に少ないので、コスト的には有利で、環境負荷も絞られるんですけども、開口のつけ方だとか、その位置は非常に慎重に検討されているので、行くと透明な感じになっています。近所の住宅は構造があって後で開口をポツポツとして、開口を小さくするから環境性能は一見、数値的には高いんですけども、行くと真っ暗で、全然風通しもよくない。そういう住宅が近年の郊外住宅で非常に多いです。そういうあり方を批判するというか、近所の住宅そのものを批判するわけではないんですけども、現代的な住宅のつくり方には参加しつつも、そのあり方を提案するようにつくる。そういうことができないかということをおぼろげに思っております。

こういうことを可能にするのはいったい何かといいますが、このようなプロセスを分解していくことであります。3階から上は店舗しか成立しませんよと言われて、とりあえず住宅を乗せたのが008番なんですけれども、それを乗せてみると今度は、誰も使えない屋上ができてしまう。誰も使えない屋上はよくないなということで分解したのが009案なんです。そうすると、今度は商店街に対して圧迫感が……。上の方は使える雰囲気になるんですけども、それに対して、下に対して圧迫感があるなというところを解消しようということで、こういうふうにして010案をつくる。

そうすると、上の方に積み重なってきたイメージができてきたので、それを強調してとかやっていくと、こういうふうになっていくんです。1番から40番がバージョンの番号でして、世代の番号でして、その間に、設計の際に気をつけるべきこと、あるいはルールとすべきことが見出されていく。このような段階的な発見をしていくことによって、より正確な設計ができて、そもそも何を問いにすべきかということが、これによって明らかになる。

前半は設計関数の策定をする過程で「検索過程」といっているんですけども、関数が定まってからは、パラメー

タをちょっとずつ変えて、パラメータを比較して、解を比較するというやり方で設計していくのです。こういうやり方をとることによって、つくり方自体が透明になっていくといいますが、そういうところがあるのではないかとこのことを考えるようになりました。

こういうやり方は、一般的には、いろいろなインプットがあって、それに対して、たとえば法律ですとか、面積とか、使い方とか、温度とか、構造とか、いろいろな入力があって、それをエイヤと設計者が統合して形にするというのが一般的なプロセスかと思います。今日では、情報技術の進展によって、たとえば音響解析とか構造解析とか温度解析とかさまざまな解析技術が発達しているものですから、そちらの方はどんどん可視化がされている。ただ、その組み合わせ方あるいは統合の仕方は依然としてブラックボックスであって、丸の部分は設計者の経験ですとか、勘ですとか、そういうものにゆだねられていく。そういうところがあるかと思うんです。

ここで私が提案していることは非常に単純なんですけど、一個の分析に対して、入力に対してひとつのアウトプットをするということを反復していくということです。こういうインクリメンタルなやり方をすることによって、より正確で透明な統合ができるのではないかと。そういうやり方をとっていくということを、私は「Super Liner Design Process」と言っているんですけども、線形性を徹底させることによって、それを超えていくようなやり方をとれないかと。フィードバックを反復していくことによって、双発的な創作ができるのではないかと。

たとえば代々木体育館でも丹下健三は模型を比較的用いて設計をしていたということがよく言われているんですけども、これは初期案で、たとえば巴型というのを神谷さんというスタッフがつくられている。ギザギザ屋根は磯崎さんのアイデアだと言われています。いくつかの人がつくっているいろいろな案を統合していったら、丹下さんが下の方でまとめていったら、最終的にはああいう巴型ができていく。

その後も、CADができてからはバージョン型のスタ

ディが割とやりやすくなったので、たとえば妹島和世さんは表参道のディオールをつくるのに、これだけの初期案をつくって、それを比較しながら解を定めていく。妹島さんは一個の住宅をつくるのに100個も200個も模型をつくるんですが、われわれの場合は、それよりはだいぶ少ない。ある意味、効率化されているんですけども、時間の流れの中で最大限精緻化していこうということをしております。

このやり方を教育に応用するというのが今の私の関心のひとつであります。2010年に東洋大学で教えるようになってから、いろいろな先生方で教えていくので、まずはそのやり方を共有して、同時に評価をもっと公開でやっていくべきだと。今まで建築の教育というのは、前の方でプレゼンテーションして、優秀作品を先生がパパパッと選んで、それを学生が発表して、順位がついて終わりだったんですけども、それを公開でやる。最終形だけじゃなくて、すべてのプロセスを一回平面に並べて、学生の目の前で比べながら優秀作を選んでいくということをやっております。

それをやるようになって、学生があまり寝なくなった。前は先生が選んだ優秀作品が発表されているだけでしたので、学生は途中で帰ってしまうし、やる気がなくなっていく。そして、同じ人ばかり選ばれてしまうということが起こってしまうんですけども、こういうやり方をとって、最後に先生方が評価して回っているところで、学生も投票に参加するんです。学生は学生で投票に参加していく。

こういうことをやっていくうちに、教員の評価と学生の評価がずれることもあるんですけども、ずれた場合にはどうずれているのかというのを説明する。そういうことをすることによって関心を喚起していくというのは非常に重要で、これが今日の社会を取り巻く現状に非常に近くて、専門家がどこか閉じたところで作品を選んで、それを当選作ですよとやると、国立競技場のように炎上してしまう。それに対して、評価に参加するとか、なぜそれを専門家が評価するのかというのをきちんと説明して



いく。そういうことをしていくと、学生も不満がなくなっていき、能動的な雰囲気生まれ、全体が参加している場のようなものができてくるんですね。

こういったことを実践しようというのが「鶴ヶ島プロジェクト」です。埼玉県の鶴ヶ島市という郊外の都市があるんです。工場等制限法が50年代の終わりにできますけれども、その後ぐらいに、われわれの大学が鶴ヶ島駅のすぐ反対側にオープンして、今は閉鎖してしまっているんですけれども、養命酒の埼玉工場ができたり、そういう時期にあわせて住宅地の開発も行われてということで、60年代の初期に一斉に開発が行われた場所があります。鶴ヶ島第2小学校は、人口が集中的に流入するところに建設されたものですが、60年代、人口が7,000人だったものが、80年代に4万6,000人になって、2000年代に7万人、2013年がピークで、今は微減ぐらいなんですけれども、このように人口は急増した場所です。

ここで起こっていることは、人口的にはまだ減少していないんですけれども、高齢化の方が深刻であります。建設事業費と扶助費の割合が、かつては40億と6億という関係だったものが、2004年に19億円ずつに並び、2011年には12億、39億という形で、逆転してしまっている。ですから、鶴ヶ島市では新規に建築を新設するというのはほぼ難しくなっておりまして、たとえば小学校施設等で雨が漏ったら事後的に補修する。だから、予防保全は無理で、事後的な保全しかできませんというぐらいに財政が深刻化しております。

このような問題は新しい問題なので、市民はおろか、議員や職員も、そこまで認知していないという中で、われわれは、縮小型の設定で施設計画をやってはどうかという課題を設定いたしました。すでに子どもたちが少なくなっていて空き教室がふえている小学校の中で、公聴会というのを地域の方を招いて、上位4案を選んで投票に進んでというようなことをやっているんです。投票用紙を配って投票してもらおうというのは、住民投票の練習とわれわれは言っているんですけれども、こういうやり方を

して、上位の人たちがテーブルに進んでやり取りをして、最終1位を決めるということを2週間に1回、5回繰り返すということをやりました。

2時間のワークショップを5回、繰り返すだけなんですけれども、これによって設計の内容が大きく進化しました。これはランキングなんですけど、このランキングを毎週繰り返す。5月の時点では、こういうおぼろげな模型なんですけれども、2週間たつと配置案、外形も少しずつ具体化して、いろいろな提案が出てくるようになります。その都度、評価が集まったり、集まらなかったりするので、設計チームがその空気を読んで次の提案を考えるということを反復していきますと、いろいろな新しい要求が出て形が具体化してまいります。住民の皆さんも非常にあいまいな施設像というのがだんだんはっきりしてきて、最終の7月の段階では、このようにしっかりした模型になってまいります。パブリックミーティングを5回ぐらい繰り返していきますと、だいぶ大きな集まりになってまいりまして、このとき市長が来てくださって集会が行われました。このときに、西尾さんにもいらしていただいたんですね。

最終パブリックミーティングのときに、学生はいつものようにプレゼンテーションをして、やり取りをして、その中から1位を決めるということをやっていたんです。このとき、最終4案残って、質疑応答を経て選ばれたのが彼なんです。このとき、彼は選ばれて感動のあまり泣いているという絵なんです。彼はこういう仕事を経て公務員の仕事がおもしろいなと思ったそうで、その後、猛勉強して、今は鶴ヶ島市役所に勤務しております。

彼が1位だったのはこういう案だったんです。一見すると、地味な案なんです。八の字動線になっていて、彼はショッピングモール型とか言っていたんですけれども、フードコートがあるような位置にランチルームがあって、放課後、そこは開放されるという想定だったんです。給食の搬入動線は、将来、学校施設として縮小したときにはここが福祉施設にコンバージョンされて、介護の送迎の車がつくことができます、という説明をしていたん

です。細かな集積が評価されて1位になる。ですから、公開型のコンペで、お祭り型で選んでしまうと、選ばれないような案なんですけれども、段階的な議論をしていくと、割とこういう案が選ばれるようになるということがありました。

建築学生の評価が高かった案は、もっとタイポロジーがはっきりしたもので、子どもたちの評価が高かったのは外部空間が多様な案だったんです。こういうものを比較しながら、単純な多数決ではなくて、自分たちはこういうのがいいと思うけれども、若い人たちはこういうのがいいと思うね、というのを市民の人たちにも見てもらいながら、投票行動を相対化しつつ、評価を反復することによって、そもそも目指すべき施設とは何かということを議論する場をつくる。そういうことをここで試みようと思いました。

このときに、この試みをその後の政策につなげていくということで最初にやったことは、市役所の中で展覧会をするということでした。10m四方のスペースを市役所のロビーにお借りして、そこで展示をする。そのプロセスが公表されていて、それを学生が説明する。これは最終日に行われたシンポジウムです。9月の定例会の一般質問の最終日とか、議会の日程にあわせて、議員も参加してもらいつつ、職員も来てもらいやすいような日程を選んで、市長と根本祐二先生と建築家の工藤和美さんと私がシンポジウムをやったりしました。

市内での議論の共有が非常に重要でして、建築系の部署ですとか、財政の人たちは、こういう問題があるというのはよく知っているんですけれども、ほかの人たちは、あした人口が流入するかもしれないとか、あした企業が立地するかもしれないというふうに、ある意味、楽観的な予測がどうしても反論で出てきてしまって、人口減少とか将来的な縮小に備えるという議論がなかなか盛り上がりがないということで、このような仕掛けをしました。根本さんにインフラ問題を提起していただいて、「財政的にすべての公共施設を維持することは不可能なんだ。日本ではその問題が顕在化するんですよ」という話をして

もらいながら、財政担当の人たちがこういう説明をしたりするんです。その後、渋谷のヒカリエでも展示会を開催し発信をしていって、新聞記事だとか、いろいろな取材が来るようになる。本社の記者の方は全国の状況を比べていらっしゃるので、地方面で学生が何か考えましたということを超えて、社会的な背景とセットでこのプロジェクトの価値を伝えていただけるようになる。そうすると、先進事例のひとつとして、こういうものが位置づけられることによって、地域の方々も「おれたちが貧乏だから、みじめな思いをするんじゃないか」という話を最初はされていたんですけれども、それが全国的な課題で、こういうことに取り組むことは非常に先進的なんだということを経験していただいて、課長も何度もテレビに出て、こういう問題を説明していただくということがありました。今は市からも「これを徐々に縮小していきます」という方針が正式に出ておりまして、これをもとにして、市でも計画策定をしていくということが行われております。

この翌年、プロジェクトが起きました。隣に遊休化していた養命酒の工場に空地活用ということで、電力の固定買い取り制度を利用してメガソーラーをつくる。メガソーラーをつくるのに、住宅地の真ん中にそんなものをつくっていいのかという話があって、地域に還元施設をつくりましょうという企画が立てられました。養命酒と行政の半官半民で施設をつくりましょうという話になったんです。そのときに、ただつくるだけじゃなくて、せっきく地域で活動が盛り上がっているのだからということで、市長にご紹介いただいて、この設計を取り組ませていただくことになりました。

これは鶴ヶ島プロジェクトの翌年に始まったものです。私と工藤和美さんとスタジオをつくりまして、大学院生が10名ほどでつくる。往年の丹下研のように、案は院生がつくって、院生が直接、住民説明していく。丹下さんのころは、いくら集団設計をしているといっても、研究室の中を出ることはなかったんですけれども、今の集団設計は住民とか企業とか行政とかいろいろな集団を含

んでいまして、この集団が設計して、投票してもらいながら、いったい何がよかったんですか、このときはこういうのが1位で、2位がこういう案だったりして、評価されているポイントを形にして見せると、いろいろ注視されていく。

言葉だけでKJ法のワークショップをやると、潤いがあるとか、その地域らしいとか、安心安全とか、割と単純化されてしまうところがあると思うんです。たとえばベンチがほしいと思っていたんだとか、外部の雰囲気はいいと思っていたんだというのは、具体的に建築を示していかないと分からないことで、逆に単体の施設像から調査をしていくというやり方がここではとられました。

駅舎型とか、教会型とか、路地型というイメージに名前をつけて、最終的には見積もりをとるんですけれども、最初はこういう金額が想定されていたんですが、実際に出てきた金額は8,596万円、ちょっと頑張っても6,600万円という価格が出ていました。他の案も6,000万を大きく超える。予算に対して見積もりが240%とか出てきていたんです。

設計者が好き勝手やって、こういう金額が出てきたということではなく、発注側の要件がまったく整理されていないで、新しい施設で、なんとなくこんなのがほしいよねとって、1部署につき1部屋ずつ要求されていたんです。それをやっても絶対予算をオーバーするというのは、こちらとしてはよく分かるわけですが、それを説得して調整している暇がないということで、逆にどれだけ予算が超過しているのかというのを見せてしまって、さて、どこを減額しましょうかというワークショップをやりました。

これは減額ワークショップと呼んでいるんです。要求を出すワークショップは皆さん、なれていると思うんですけれども、要求を減らすワークショップが重要なのではないかと。丹下研にいた浅田孝も格言として言っていたんですが、「設計の本質は見積もり調整にあり」という格言があって、予算を見積もりが大きくオーバーしたときに初めて、どこを削るか、何を大事にして何を犠牲にす

るか、妥協するかという話が出てきて、そこで初めて本当のデザインが始まるんだという言い方があるんです。その通りでありまして、減額プロセスに参加してもらわないと意味がないのではないかと。縮小というのは、そういうことだと思うんです。

そういうことを施設整備のときにやってみたいということをするうっと思っていたので、このときは小さな施設で特別な施設ということもあって、特別に許可をいただいて、普通はこういうことをやると問題になると思うんですけれども、予算が超過した状態で話し合いをします。ですので、新国立なんかと同じようなことで、事前調整がなされないまま発注が行われて、設計者に責任が丸投げされる。そういう状況を回避する意味でも、事前調整の段階で、要件整理の段階でこういうワークショップをするということはひとつの試みだったと思われる。

その後、いろいろなスペックを調整したり、部屋数を調整したりして統合案をつくって、だいぶコンパクトになるんですけれども、各案で評価されていたポイントはすべて盛り込まれていまして、最終案には駅舎型の要素も教会型の要素も路地型の要素もすべて入っていますという形で統合案がつけられました。

皆さんにそうなっていますねというのを確認していただいているんですけれども、展示していくと、最初の10案があって、10案のポイントは3案に統合されて、3案が1案に統合されている中で、すべて保存されていく。なので、アイデアを集約させていくプロセスですけれども、その中で圧縮しながら、その要素は引き継がれていく。そういうあり方で設計をするというのが、このときの試みでありました。

公聴会をやって、いろいろ批判的な意見もいただきながら、最終的に建て方を議論していくのです。これは小さな木造の施設なんですけど、地元の工務店が施工されていて、設計にかかわった学生も現場でいろいろ教えていただきながら、上棟しました。上棟式のときに呼んでいただいているんです。

この事例は「環境教育施設」という小さな施設です

れども、われわれの考え方としては、将来的に施設再編が面的に行われていくと、市内でコンクリートの建築は、いわゆる重量建築物というのは拠点化したいくつかの施設に集約されていくだろうと。地域に残る施設は、このように木造の低層で除却費も安くして、かつ地元の工務店が施工もできて、管理もできて、地域の人たちが自分たちで運営できるような小さな施設にダウンサイジングしていく。

そういう一種の施設像を表明しようという一種のプロトタイプとしての考え方を反映したものでして、ここは小さい施設なんですけれども、将来的に公共施設というのはこうなっていくんですよと、だから、合板の素地仕上げなんですけれども、立派な石が張ってあったり、壁紙を張ったんじゃないかと、これからの公共施設はこうなるんですよということを示す一種のモデルルーム的な役割を示そうではないかということをつくっていかうとしました。

実際、環境教育が始まっていて、これは塗装ワークショップなんですけれども、あえて1面を未塗装で引き渡すということをお願いしてやらせてもらいました。これを地域の人たちと一緒に塗る。これは何をやっているかということ、今まで公共施設は不具合があったら電話すればいいだけだったんですけれども、そうではなくて、これからは、ある程度の問題は自分たちで解決をしなくては行けない。だから、塗装のときも、こうやってやり方を覚えておけば、はげてきたら自分たちで塗り直すんですよと。これからの公共施設は、そういうふうに管理とか運営の負担を共有していくんですよと、そういうようなことを共有するためのワークショップの試みでありました。

その後、縮小社会とか、こういう施設のあり方を考えるという試みは継続してしまっていて、こういうシンポジウムをやったり、これはお祭りなんですけれども、遊休地を活用したイベントのたびに、こういう施設を使ってどういうまちづくりをすべきだというような割と理念的な議論をここではやろうとしています。

ここの方々は、いわゆるアクティブシニアの住民と



藤村氏

呼ばれる方々なんですけれども、この世代の方々はどういうふうに将来を描いていくかというのが縮小社会のひとつの断面であります。鶴ヶ島の中では、より本格的な面的な議論に移行してしまっていて、市全体の施設をどのように再配置していくのか、特に学校の割合が大きいんですけれども、それをどうしていくかということを議論しています。

今は教育委員会の中でもはっきり議論が定まっていないのですが、学校再配置に向けた検討をこちらでいろいろな案をつくったりして検討している。今年度は教育委員会でワークショップをやっている、教育主事のワークショップがあり、次に教頭先生のワークショップがあり、今度は校長先生ワークショップがあって、教育長も参加して、次回がいよいよ本丸というところなんですけれども、こういうワークショップを繰り返しながら、まずは市長部局の議論だけじゃなくて、教育委員会も議論に参加してもらおう。その後、庁内でどう計画を立てられるかということまで、ようやくこぎつけてまいりました。

鶴ヶ島市では、大学でいくつか政策的な課題をヒアリングのうえであいうプロジェクトを設定して、大学でためにワークショップ型の授業を展開して、もう1回、それを政策側に反映してという形で進んでいくということで、建築から財政、まちづくり、教育へと、だんだん総合的な提案に近づいてまいりました。というのが鶴ヶ島での試みでした。

最後に、もう一個だけプロジェクトをご紹介して終わりにしたいんですが、「大宮東口プロジェクト」です。先ほどのような縮小型のプランと同じような話ですけども、市の中心部に区役所と小学校が隣接して並んでいるという土地がありまして、公有不動産をどうしていくかというのをわれわれと東京藝術大学の合同の授業として展開いたしました。

当初は、先ほどと同じようなやり方で利活用イメージを提案していく。小さな容積率のものから高容積のものまで提案していきますよということをやしまして、これを議論するということをやっていたんです。その後、展示会をやって、皆さんに来ていただいて、市長にも見てもらって、シンポジウムをやってというのをやりました。

ひとつ段階が進みましたのは、中心市街地にある旧大宮口フトの最上階にスペースをつくりまして、ここはいわゆるアーバンデザインセンターの準備施設という機能的な位置づけがなされまして、さいたま市が共同で運営する施設として、こういう箱をつくらうと、場所をつくらうということになりました。そこでわれわれは、今まで会議室とか昇降口かいろいろなところを転々としてワークショップをやらせていただいたんですが、ようやく常設のスペースでできるということになりまして、それがオープンしましたのが昨年7月です。

ここで市長にも来てもらって議論をしたのですけれども、3年目になりまして、大宮の東口では区役所移転が正式に決まりました。それと同時に、再開発の準備組合が組合に発展するということも見えてきて、都市計画道路の開通も2020年ぐらいにめどがついてきたということで、その次の段階として駅とか跡地をどうするかという話が起こっております。

東口がこのように目に見えて動いてくるということもあって、いよいよ小学校の将来計画を本格的に考えなくてはいけないということで、行政からも、来年のプロジェクトはどうしますかと言ったら、これをやりたいということを書いていただいて、本格的にプロジェクトを展開

いたしました。

大宮駅西口では、桜木小を再配置して、そこを種地としたソニックシティの開発が80年代にあったんですけども、東口の大宮小の場合は、区役所に連担した2.7ヘクタールの土地の容積率をアップしますと、16万㎡ぐらいの潜在的な床面積がある。これをどう位置づけるかというのは東口の将来にとっては非常に大きなことであるということで、これを検討する。

最初は容積率別のチームをつくりまして、それぞれが住民の方々に案を提示して、容積率が違うと、こんなことができますということから検討を始めまして、その後、具体的な案をいろいろ検討して行って、最終回では、このようかなりボリュームのある模型ができてまいりました。

これは400%の学校あり、基準容積率いっぱいまで使いまして、現状では2.7ヘクタールで使っている床面積は2万7,000㎡ぐらい、約100%しか使われていないんですけども、基準容積率まで上げて学校を立体化して、その下をコンベンションホールにして、横にホテルのタワーをつかって、間の体育館とかプールを両方から使えるようにしてとかということをやると、こんな施設ができるんですよ。全体としては、400%で学校があって、こんな施設がつけることができます。

次の案は、学校を仮に再配置すると。地元の方は移転絶対反対と言っているんですけども、仮に移転すると、こんなことができますよ。敷地の200mの幅いっぱいに展示ホールをつかって、その上にホテルをつくることができます。より大きなイベントが誘致できます。このコンベンションホールは市長が、「さいたまアリーナ」と「ソニックシティ」の稼働率が非常に高いので、そういう箱をここにつかって誘致したいんだということをおります。地域の人たちのもとから議論されている東日本の顔をつくるか、拠点をつくるという話をどうするかというのを実際に具現化してみるというプロジェクトです。

さらに400%の容積率を緩和すると、展示場を積層し

て、香港とか大阪会議場がやっているような積層型のコンベンション施設をつくと、こういうものができる。ただ、ここまでいくと非常にリスクも大きい。高崎だとか、他の都市でもコンベンション施設をつくらうという動きがある中で、さいたま市はどういうボリュームがあるべきかという議論をする中で、千葉、横浜までいかなければ、高崎だとか、ほかの都市に差をつける大きさはいったいいくつか。600ぐらいまでいくと、ある程度のボリュームが確保できますよ。けども、それは行きすぎだということで、もっと小さな施設で大宮らしい開発もあるのではないかと、容積を少し余らせた案もつくって、構造的な検討もしっかりしました。

これは設計図書なのですけれども、4年生になると、これぐらいの図書が書けるようになりまして、ちゃんと構造図もあって、部材リストもあって、先ほどのようなボリュームもしっかり構造的な検討もしたうえで、さらに事業採算のシミュレーションをして、経済波及効果の試算をして、そういうこともやって、たとえば数字を出しますと、200%、600%では容積は3倍なんですけれども、経済波及効果は10倍になりますと、そういう数字をセットで提示しますと、住民の方々は模型を見ただけですと、小さい方がいいよねとか、もっと大きくなければだめだという単純な二項対立になってしまうことが多いんですけれども、そもそも学校を残すというのはどういうことで、たとえば学校を残すとすると、全体でPFI事業でサービス購入をしてとか、いろいろなスキーム設定があるんですけれども、学校を残すということは毎年1.5億円の市税投入がこの場合だと必要ですよ、学校を残さないとする、こういうふうな数字なんですよという説明をすると、より複雑な判断ができるようになる。この中で大宮の人たちはいったいどういう施設をつくるべきかというのが、より具体的にイメージできるのではないかとこのプロジェクトの趣旨でした。

このようなことをやっていきますと、数字が具体的にでていきますと、行政とか、地元の方とか、関係者の方とか、非常に真剣な議論になりまして、それをいろいろご

説明して、ああでもない、こうでもないということをやって投票していただいてということをするんです。検討段階であれ、構想段階の前ぐらいの段階で、こういうやわらかい検討の場があって、要件を整理するためにいくつかバリエーションをつくって検討するという場がつけられることが大事なのではないか。

今は、そういう場が行政の中にはないですし、そういう予算も、そういう枠組みもないものですから、大学という場でやるしかないんですけども、将来的には行政がきちんと予算をとって、こういう場をつくって市民に問いかけてから建築の企画をするべき、あるいは事業の企画をするべきである。そういうことを提言するためのひとつのイメージになるのではないか。

「学生は使いものにならない。おまえたちは何を教えているんだ」と、いつも企業の方から怒られるんですけども、学生に対しては非常に高度な要求、建築でいうと手書きだけではなくて、CADもBIM (Building Information Modeling) もできなくてはいけないという中で、学生は他方で、箱物をつくりすぎの時代だから、建築は要らないと言われて手が動かなくなっているんですけども、なるべくこういうリアルな設定でリアルな課題をするというのは教育的には非常に重要なのですが、そういう教育演習上の目的と社会実験的な目的を重ねていくことによって、こういう場をつくっていくことには一定の意味があるのかなということを思いました。

こういうやり方は、大学がないところでもやっていまして、愛知県の岡崎で国交省の交付金がついて、99億ぐらいの大きなものが5ヵ年で動くというのがありまして、これがいきなり動き始めたので、市民の中でも賛否両論渦巻いているのですが、私がそこへ呼ばれて、東岡崎の駅前のビルの3階の空き室で学生によるシャレットワークショップ(専門家が短期間に協同して行うワークショップ)を行いました。実際に市民の方々をまじえて投票もしてもらい、市長と意見交換をやりながら、案をつくっていきました。

ここでも箱物をつくらうとか、街路整備しようとか、

河川整備しようというのがあるんですけども、それを庁内に持って帰って、こういう提言にまとめて、庁内で検討会議をやって、交付金がワッと各課にばらまかれて、一斉に各課が自己流で発注をしてという中で、最初の1年半でちゃんと調整機関を設けて少しずつ調整していきましょうということを提案して、こういう会議をやって、私が座長を務めさせていただいているんですけども、この関係課が集まって、隣の課は何をやっているのか、全体の課題はいったいなんなのかということをしつづ詰めていくということをやっております。

こういうことをやることの頭に、先ほどのようなやわらかい検討の場を、10日間のワークショップを夏休みにやるということなんですけれども、そういうことがいろいろな議論の頭にあることによって、それがスムーズに進むということがありまして、こういう検討の場を段階的にやわらかいところから攻めていくというやり方で解決できることがいろいろあるのではないかと考えている次第であります。

さて、まとめさせていただきます。丹下健三のときに人口増、拡大・集中というものをどう対処するかという議論があって、公共政策と学という関係で言いますと、学が求められるというのは、理念とか構想というのを形に置きかえたいとき、あるいはニーズが変わるとき、制度とか発注の形式が変わるときに、実験の場としてこういう場が求められているのがもともとあるかと思うんですけども、今日、それは現代の社会が求めるプロフェッサー・アーキテクト像にもなっていて、学の新しい役割の発信にもなっているところがあるのかなと思います。

こういう社会実験あるいは教育実験をどう重ねるかということがあるんですけども、他方で縮小社会ということを考えていきますと、先ほどの香川県庁舎と南三陸の違いあるいは対比が非常に象徴的なように、現代のソーシャル・アーキテクトという私が定義したい建築家の役割像は3つあります。ひとつは、「みんなで集合的に考える」ということの意味が大きく出てきているのかなと。きょうずうっとお見せしてきたプロジェクトで共通

していることですが、かつてのように、強烈な思想を持っているトップに対して、どういう回答を与えていくかという役割が転換していて、集合的な思想をどう形に置きかえていくかということがひとつの職能になっているのではないかと。ですので、社会の構想を個人が構想するというよりは、社会が社会を構想するところがあって、それを可視化するというのがひとつ。

もうひとつは、それを実現するために、「ゆっくり段階的に考える」ということで、鶴ヶ島市から学んだことといえば聞こえはいいんですけども、非常にゆっくり鶴ヶ島市の場合は進んでいまして、岡崎とか、さいたまみたいにお金があったり、お金がついていたりするところでは一気に進んでしまうんですけども、鶴ヶ島市のように、お金がなくて、かつ関係者のプロジェクトの経験があまりないところだと、結果的に非常にゆっくり考えていくことが行われていて、そういうことが総合的な政策のためにはよい。そういうことを考えると、段階的に考えるということはどう構造化するか。

もうひとつは、「その判断を尊重しつつ、思想が表れるように設計する」ということで、この場合、それが非常に重要な気がしています。どういう考え方でアイデアが生まれているのかというのを明らかにすることによって、1と2を実現することができるのではないかと。

これを従来の個人的な、そして不連続的な、あるいは、ある種の作品的な表現というんでしょうか、そういう見え方をする往年の建築の見え方と対比させて、私はこれをソーシャル・アーキテクトというカタカナの名前をつけて区別したいと思っているんですけども、こういう考え方が今日の縮小時代の建築家像として浮かび上がってきているのではないかと感じるようになりました。

きょうのお話は縮小時代にあらわれたいくつかの思想を統合できるのではないかとということですけども、こういうことを今後も実践の中で展開してまいりたいと思っております。きょうは学の中間的な組織の可能性ということを含めて、お話をさせていただきました。

どうもありがとうございました。(拍手)

## 質疑応答

**【司会】** ありがとうございます。

この後、質疑応答とディスカッションに入りたいと思います。前半は戦後の建築をすうっと振り返っていくと、時代の移り変わりとパラレルで、「その社会が建築をつくる」という言葉もありましたけれども、時代の要請を建築家が受け止めてそれが建築に表されてきたことをたどっていったのかなと思います。近年は都市の巨大化を経て、まちづくりに重心が移る中で、建築家個人のアイデアよりも、コミュニティの中でどう合意形成しながらつくっていくのが大事ということに変遷していった、建築の設計プロセスを実際の住民の合意形成に生かしていく、という後半の実践の活動の話につながっていたのではないかと思います。最後にはそれを「ソーシャル・アーキテクト」という新たな建築家像として提起していただきました。

それでは、質問をいただいてディスカッションに入りたいと思います。いかがでしょうか。

**【質問】** 本日はとても刺激的な講演、ありがとうございます。

1点、ご質問です。藤村先生がやられている設計プロセスを拝見させていただくと、ワークショップや膨大な量の模型、人かける日というか、エネルギーをかけられていて、そういったことをたとえば大宮のような都会でもやられているということに大変驚きを覚えました。都会暮らしを選択する人々は、タワーマンションがたくさん建っているようなエリアで、会社に行ってお金は稼ぐけれども、まちのことはお金で解決して、自分はタワーマンションでいい感じに整備された暮らしをするみたいなことを求めている方も都会には多いのかなと私は個人的に思ったんですが、そういった考えは、これから日本では通じなくなっていくということでしょうか。

以上です。よろしくをお願いします。

**【藤村氏】** ご質問ありがとうございます。

大宮の場合で言うと、ここに参加されているのは住民の方もいらっしゃるんですけども、基本的にはオーナーが多いというのはあります。オーナーの方が思い入れは強いのかなというのは全体としてあるんですけども、鶴ヶ島を見ていると、かつては埼玉都民で都心に出ていた方々が地元へ戻ってきて第2の人生を始めるにあたって、地域というものを改めて考えていく。その中でそれぞれが培われた経験を生かされて、たとえば県職員だった方とか、ホングの技術者だったとか、いろいろな方がいらっしゃるんですけども、その方々がスキルを持ち寄って動きをつくられている。ということがあるので、老いとか高齢化とか、さらに縮小ということがある種の引力になって、こういう場をつくらせているのかなという感じがいたします。

アクティブシニア層の皆さんが地域に戻ってこられるタイミングと建築の老朽化のタイミングは一致していきまして、建築の50年、60年という耐用年数の期間とライフサイクルと、実際に使われているユーザーの方々のライフサイクルは、郊外都市だと集中投資した関係で割と似ていて、この場合はたまたま一致しているのかなということで、それを強く感じるところです。

大宮の場合はどうなっていくのかというのは、今後の展開によるのですが、学校施設に関しては社会的効果が高く、たとえば千葉の幕張では打瀬小学校が95年にできましたけれども、幕張ベイタウン全体の計画にかかわって、若手のチームでかかわっていたシーラカンスのメンバーがコンペを経て打瀬小学校の設計をやることになって、まちの考え方と同じ考え方でオープンな小学校をつくるのだという思想で施設を設計したところ、それが人気を呼んで、いまだに幕張ベイタウンは子育て層が非常に高く、周辺よりも子どもの人数が多かったり、教育施設なんかは都市型のコンテキストでも非常に影響力が大きかったりするようなんです。

ですので、公共施設は、お金で解決できない部分の役割というんでしょうか、民間で解決できない部分の





役割は、いまだに社会的効果は侮れないところがあると思っ  
ていまして、そういう部分に関して働きかけていくことが重要  
なのではないか。特に郊外都市の公共施設マネジメントは医療  
とか福祉にもかかわりますし、防災にもかかわりますし、その  
効果が高いことから、個人的には非常に興味をもって取り組  
んでいるところですけども、その辺のことを考えております。

**【質問】** ありがとうございます。

**【司会】** 自治体の側から補足といいますか、私からもコメント  
をさせていただきたいと思います。私はさいたま市で働いて  
いたのですが、さいたま市は全国でも最も財政状況がいいと  
言われています。人口も多いわけです。しかし、この公共施設  
の老朽化の問題は全国共通なんですね。全国でも最も条件  
がいいさいたま市ですら今後、今公共施設にかかっている経  
費の倍の経費がかかるだろうと言われています。逆に言えば、  
施設を半分に減らさなければ立ち行かないというくらい非  
常に深刻な状況にあります。タワーマンションがあるよう  
な大都市においてもこの問題の深刻さは同じで、それが住  
民に突きつけられていて、合意形成しながら、それをどう  
乗り越えていくかというのは、地方部も都市部も共通とい  
うことが言えるのではないかなと思います。

**【藤村氏】** 先日、被災地を回っていて思ったんですけども、  
被災地は、ちょうど同じタイミングで、一斉に災害が起  
こって、一斉に交付金がついたりして、一斉に事業がスタート  
しているわけです。

陸前高田はかさ上げを選んで、死者が出なかった建物を残  
して、南三陸は防災庁舎を残して、釜石だとか大船渡は防  
潮堤をつくっている。お金は同じように降ってきているん  
ですけども、使い方は全然違う。それが都市の戦略とい  
うか、姿勢をあらわしていて、その成果はおそらく10年  
後ぐらいに大きい差になるんだと思うんです。

公共施設マネジメントもそういうところがあるのではない  
かと思っています。1960年代に一斉に日本で集中投資さ  
れたインフラのマネジメントをどう対処するかによって、  
その結果はその後の都市計画を大きく左右する試金石で  
はないかと思うんです。

そういう認識は少ないのではないかな。場当たりに、適  
当に施設を複合化したり、適当に利活用したりしている  
ところが多いんですけども、本当は戦略性を持って総合  
的な戦略の中できちんと一個一個の施設を考えていか  
なくてはいけないという中であって、それをどうするか  
というのは非常に難しいところかなと思っています。

**【司会】** ありがとうございます。

**【質問】** お話の中で減額ワークショップの取り組みにつ  
いてお話があったかと思います。非常におもしろい取  
組みだなと思っています。縮小のまちづくりを考えてい  
くときに、何をつくっていくか、何を増やしていくか  
というのではなくて、何を減らしていくかというのを  
住民ですとかステークホルダーの方と一緒に議論する  
のはすごい必要だなと思います。

こういう模型を使うと、ここに何々がほしいですか、  
こういうのがほしいと、どんどんプラスになっていく  
のかなというイメージがあったんですけども、その中  
で何かを減らすという係争的な話をするとき、具体的  
に当日はどのような流れで行われたのかというのと、  
合意形成するにあたって衝突じゃないですけども、  
こういう難しい縮小のまちづくりみたいな話をやる  
ときに、どんな感じで行われたのか、詳しく聞  
きたいです。

**【藤村氏】** ご質問ありがとうございます。

この施設の場合は住民の利害にそこまでかわらないというか、環境教育施設というところがあって、こういう実験的な試みをオープンにできたところはあったんです。そうはいても、関係の部署の方は、特に理由はなく1部屋ずつあるわけですね。何とか課は1部屋、何とかは1部屋。それをいろいろ聞いていくと、よくよく考えると、この部屋とこの部屋が一緒に使うことはないから、重ね使いをすれば、同じ部屋を違う時間で使えばいいじゃないですかとか、トイレも別々にほしいとおっしゃいますけども、間に一個にして、こっちとこっちから使えばいいじゃないですかとか、そういうことをプランをもって説明していくと、それ自体はできていく。ですから、減額ワークショップというのは、向こうからアイデアは基本的にあまり出てこないと思うんですけども、こちらからどんどんアイデアを出してお話をしていく場であるんです。

建築家の作業というのは、コストを削るというのが設計作業の大半でありまして、そのときにいったい何をするかといえば、面積や機能の見直しというものもあるんですけども、機能を重ねていく。たとえば本棚をつくりたいけど、本棚を構造に使えないかとか、本棚の棚板自体が立派な構造を持っているから、その棚板に軸力を負担させれば柱が取れますとか、そういうことをふだんやっているの、いろいろな機能を複合化させていくことによって、多機能化させることによって、減額できるんですよ。みたいな提案は、ふだんからよくやっていることです。建築家の持っている統合的思想というんでしょうか、いろいろなものを統合していく思考の形式みたいなものが、割とこういうところで生かしやすいのではないかとというのが個人的な見解といいますか。

なので、建築家のスキルをこういう場ではもっと生かすようにするべきで、ザハ・ハディドのやり方とか、ザハ・ハディドの競技場のときのように、お飾りにしておいて、下で、ただ調整して、ザハに説明させない



中谷理事長

みたいなやり方でなくて、本当はザハ・ハディドでも日建設計でも表に出てきて調整を直接すると。縮小だとか、調整の提案を具体的にしていくという役割を本当は設計者本人に持たせるべきだと思うんですけども、現状では要件を整理してから設計するとなっているので、要件を整理するところで設計者の統合的な思考がなかなか生かされないのではないかとというのが社会的な問題かなと思っております。

**【中谷理事長】** きょうのプレゼンはすばらしいの一言に尽きますね。建築をやっている方が関係者全員の満足を引き出すための民主主義的な解決法を提案され、実際に実践されているということに大変な驚きを感じました。

確かに、経済が右肩上がりのときには民主主義はうまく機能することが多い。というのは、プラスの利益の配分を決めるだけだから、民主主義的方法でも妥協点を見出しやすいのです。しかし、経済が縮小するときには「痛み」を誰がどういうふう負担するかという話になるので、なかなか妥協点を見出しにくいわけです。今回のお話は、公共的な施設をつくるというところですけども、実際に関係者に予算が少ないといった苦しいポイントをしっかり理解してもらったうえで熟議を重ね、本当に削れるところはどこなのということで合意していくという、まさに縮小時代の民主主義のあるべき姿のひとつの解決方法を示していただいたと思うのです。それを政治学者がやるのではな

くて、建築を実際に手がけている人が提案して実践しているというのにすごいなということを痛感した次第です。

ちなみに、先ほど鶴ヶ島プロジェクトでしたか、目標額2,800万というのがあったんですけども、最終的にはいくらになったんですか。

**【藤村氏】** 最終的には3,900万だったと思うんです。周辺の外構費とか、ほかで確保されている予算も調整して、こうやってかき集めて、一応なんとかまとまって……。

**【中谷理事長】** 3,900万。すばらしいですね。右肩上がりの時代だったら、8,500万でも収まらなくて1億3,000万くらいになってしまうかなという感じですね。そういう意味で、藤村さんのお話はすごい参考になります。これから学校とかどんどん要らなくなっていく施設が増えていくわけですから、全国の自治体がこういう手法をうまく活用されると、地域再生にも大いに役立つかなという印象を持ちました。

ひとつだけ質問をさせてください。民主主義的に最終デザインを決めるといっても、根本的な価値観が衝突するときはそういった解決が可能かどうかという点です。たとえば京都の町屋の町並みを生かしながら何々をしたいということがあったときに、伝統的な京都の町並みを愛する人たちが一方にいて、「これは維持しろ」と言う人もいれば、「そういう効率の悪いことはやめて、もっと近代的な建築に変えろ」と言う人たちもいる。

そういう価値観あるいは美意識が真っ向から対立してしまった場合に、いったい誰がどういうふうにして解決に導くのか。藤村さんのお考え、こういうふうにしたらうまくいくかもしれないということがあれば、お教えいただきたいと思います。

**【藤村氏】** コメントとご質問ありがとうございます。

ケース・バイ・ケースでいろいろなやり方をためますんですけども、根本的な価値に対するひとつの例として、今取り組んでいるのは世田谷区役所の建て替

え問題があります。建築界では前川國男さんの庁舎なので、保存したいと保存要望書を提出していて、今週、ミーティングをするんです。選択肢をうまく整理して伝える。第1庁舎、第2庁舎、第3庁舎と、全部完全保存というやり方もあれば、自民党の議員は全部つぶして玉にしないさいという人がいて、両方の極だと思っただけですね。間に中間的な、広場は保存して、タワー型じゃないけど、全部新築だけけど、広場の空間性で保存するというやり方もあれば、中間に一部を保存して、広場にかかわる第1庁舎とホールだけ保存して、一番奥は新築にするというやり方もあって、原理主義的なやり方と、片方の新自由主義的なやり方があるんですけども、その間に中道的な、中道にも右派、左派ってあるように、ちょっとずつ残すとか、いくつかあると思うんです。

そういうオプションを整理したうえで議論を複数回重ねていきますと、それなりにとるべき選択が議論の中で決めていくことができるのではないかと。建築界が保存要望書を出すとき、どうしても完全保存となってしまうので、対立してしまって負けてしまうということが多いんですけども、その中間のオプションをうまく落とすために、どういう議論を組み立てるかというのが毎回、原論的な設計というんでしょうか、そういうのが重要な気がしてしまっていて、きちんと場をつくっていくことによって二元的な対立に陥らない熟議が可能なのではないかと。そういうことを形に置きかえるというのが建築として大事なのではないかとっておる次第です。

**【中谷理事長】** すばらしいお答えでした。基本はすべての関係者とともに集合的に考えていく、その中でベストな解を探していくということでしょう。特にすごいなと思うのは、ゆっくり段階的に考えていこうという発想です。そして履歴ですよ。履歴を徹底的に保存して、gradual stepというか、一步一步前進しようよという姿勢。これはすごい。この若さでと言ったら語弊があるかもしれませんが、こういう発想のもと、地

道に着実に、みんなの意見もできるだけ取り上げつつ、何百回やってもいいから、少しずつでも改善していこうよという物の考え方って、すばらしいと思いました。

あえて言わせていただければ、若い人の中には、政治学の世界でいうところの「設計主義」に走る人が多いですね。従来から積み上げてきたことを無視してしまって、思いつきのアイデア、理念だけを持ち出してきてすべてをゼロから作ってしまおうとする。そういう傾向が非常に強い。

しかし、藤村さんは、それとは正反対ですね。着実に丁寧にいいところをできる限り生かしながらみんなが満足できる結果を創り出そうしておられる。価値観が対立したら、対立を対立として放置するんじゃなくて、どこかに落としどころはあるはずだということで、一步一步詰めていこうよという。藤村さんのような年齢でこういう価値観をしっかりとっておられるというのは、いったいどういう育ち方をされたのかなと正直興味をそそられました。

**【藤村氏】** どうもありがとうございました。

**【司会】** せっかくですから、大阪本社から一言あればご質問いただいて、それで締めにさせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

**【質問】** 最近、市民のニーズを取り入れてまちづくりをするやり方って、ものすごく多様化していると思うんです。以前だったら、設計プロポーザルで専門家がつくる人を決めて、行政と設計者が決めてしまうというやり方だったんですけど、最近では、そこから市民のワークショップをかなり回数重ねてつくり上げていくというやり方も、かなり多様化してきていると思うんです。藤村先生のされているやり方と私が申し上げたやり方で、どういうところが違っているとお考えですか。

**【藤村氏】** ご質問ありがとうございます。

私が建築の設計を勉強する前、東工大の社会工学科にいたのですが、そこでやっていたのは住民参加のまちづくりの研究室で、そこでいつも疑問に思っていたことは、いわゆるKJ法でワークショップをやった思



藤村氏

想をまとめていくのですけれども、最初はすごく感動しました。当時、印旛村で都市マスタープランを書きかえるという、ちょうど地方分権の走りの時期だったので、それのお手伝いをしていると、黙って座っていらっしゃる方々が、ものの15分ぐらいで活発に話をされて、それはすごいなと思ったんですが、それをある程度やって、こういう考え方とああいう考え方がありますという構造化まではできるんですけども、その後にそれを実際に提案に置きかえましょうという、まったく飛躍してしまう。

建築コンセプトだけまとめて、コンセプトということでキーワードにいくつかまとめて形を変えようとすると、飛躍してしまって、一応、ワークショップをやった設計したということになっているので、ある種、住民の人たちは納得といいますか、不満は言わないんですけども、はたから見ていると、この議論をしていたことと、この形はそんなに関係がないのではないかと、このことを思う場面が多かったんですね。

その飛躍をどう超えていくかということを考えていくときには、ひとつの入力に対してひとつ出力をするというやり方で、段階的に合意をとっていきやり方ないと、最終成果物と要求は本当の意味で一致していないのではないかと、思ったのが1点ありました。

もうひとつは、投票をもう少し批判的に応用するやり方はないかということも思っていました。ふだんワークショップをしていますと、初回では無難なもの

が選ばれて、2回目は派手なもの選ばれて、本当にいい議論になっていくのは3回目以降なんです。反復を最低3回、できれば5回やることによって、本当に必要なものは何かということが分かってくる。

そうすると、投票の意味が変わってきまして、最初はただの多数決というか、人気投票みたいなものなんですけれども、だんだん意思表示とか意見の共有みたいな感じになってきまして、多数派としてはこういう意見なんだけども、マイノリティのこういう意見の大事さもあるではないかということが場の中で相対化されていく。相対化されたものを目の当たりにして、最終案は多数派を尊重しつつも、少数派の意見も取り入れたような最終形ができるべきだと思っています。

投票というのは比較的簡単な意思表示で、言葉にしたり、手を挙げて物を言ったりということをしなくても、自由記入欄にいろいろ書くこともできますし、そういうやり方で、割とハードルの低い、障壁の低いやり方ではないかと思うことがあるんです。あるやり方を通じてやっていきますと、マイナーな意見もきちんと尊重した形で最終形をつくることのできるのではありませんか。

なので、ワークショップ、場をつくりましょうということに関しては私も非常に賛成なんですけれども、そのあり方を慎重に検討しないと、言葉だけの抽象的な議論を形に置きかえたという経緯のアリバイ的なものになってしまうことも多いです。さらに、多数決も単なる人気投票になってしまう。

ですから、こちらが設計論を持っていて、きちんとこういうふう設計をするのだという、模型で段階的につくるみたいな設計論の整理がないと、いくらワークショップをやったといっても、本当の意味で集合的なニーズを把握したことになるのではないかと思います。

そういう場を効率よくといいますか、2時間のワークショップを5回という、ある種の効率性を追求しておりまして、無限にワークショップをやるということ

ではないんですけれども、ある限られた場の中で最大限集合的な創作をするにはどうしたらいいかということを試行錯誤しているというのが、私の今の一般的なイメージとの差異化といいますか、提案です。

**【質問】** どうもありがとうございました。

**【司会】** 長時間にわたって、どうもありがとうございました。これで勉強会は終了させていただきたいと思えます。講師の藤村先生に、いま一度大きな拍手をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

開催日：2015年11月30日(月)